

「反原子力声明 生命と愛と平和と希望を求めて」

2年前の1986年4月26日、ソ連チェルノブイリ原子力発電所で核暴走事故という原子力発電史上で最悪の重大事故が起きた。このたった1回の事故で広島原爆の1400～1500倍もの死の灰がソ連を始めヨーロッパ全土にまき散らされ、日本にも予想外に早く放射能が飛来した。まさに地球規模の汚染の広がりである。そのため、急性障害ばかりでなく、晩発性障害や生物濃縮、食物連鎖などを通して生命・環境に対する長期にわたるはかり知れない影響が憂慮されている。まさに、広島・長崎・ビキニについて4回目の核による人類の大惨禍である。

英国セラフィールド使用済み核燃料再処理工場による環境汚染、米国スリーマイル島(TMI)2号炉の重大事故…と次第に危機的様相を強める原発事故に対して私たちは憂慮を深めていたが、ついにチェルノブイリ原発事故が起こったのである。チェルノブイリ原発事故は、ひとたび原発で重大事故が起これば、その惨禍は想像をはるかに超え、さらに放射能による被害は国境を越えた地球規模のものになり、生命・環境に対する長期にわたる被害は、もはや回復しがたい破壊と荒廃をもたらすことを誰の目にも明らかにした。

私たちは、この緊急かつ危機的状況に直面して、声明を出し、特に以下のことを訴えるものである。

1. 私たちキリスト者は、イエス・キリストにおいて、「神のかたち」としての人間の生命の尊厳と、神の被造物としての自然・環境のかけがえのなさを知らされた者である。主イエス・キリストが「わたしがきたのは……命を得させ、豊かに得させるためである」(ヨハネ10:10)と言われたように、私たちの主は私たちに命を豊かに得させようとしておられる。私たちは、主が約束したもう生命へと呼び出され、その生命に共に参与する恵みが与えられている。したがって私たちは、人間の生命や人類の将来を脅かし、生態系を破壊しつつ、自然や環境に対して破壊的影響を与え、さらに核武装化と容易に結ばれる原子力発電の危機的性格を強く認識し、憂慮するものである。
2. 私たちキリスト者はまた、イエス・キリストにおいて、神が「最も小さい者」に仕える方であることを知らされ、和解の福音をゆだねられている。ところが原発は、ウラン採掘から発電や放射性廃棄物の処理に至るまで、たとえば、ウラン採掘地の米国のインディアン、オーストラリアのアボリジニー、南アフリカ・ナムビアの黒人、原発労働者、放射性廃棄物の投棄に反対する太平洋の島々の住民や青森県の六ヶ所村や北海道・幌延町の住民など、つねに最も小さい者たちを犠牲にし、差別することで成り立ってきた。さらに原発は回復不可能な環境、処理不可能なほう大な放射性廃棄物を子や孫の世代に押しつけるものである。私たちは、このことを認識し、憂慮する。

3. 去る1988年7月17日に発効した日米新原子力協定に基づき、日本が英仏の再処理工場で回収してもらったプルトニウムを日本に空輸するための交渉が進められている。放射能の半減期が二万四千年余りというプルトニウムは、グレープフルーツくらいの大きさになれば核爆発を起こす、きわめて危険なものであるばかりでなく、俗に「耳かき一杯で100万人もの人々に肺ガンを起こす」と言われているように、かつて人類が造ったもっとも毒性の強い物質である。万一航空機事故が起これば取り返しのつかない大惨事になるのは明らかである。このことを私たちは認識し、憂慮するのである。
4. 原発は原爆の技術から始まり、原子力の「平和利用」はいつまでも容易に「軍事利用」すなわち核武装化に転用できるものである。また原発推進は、つねに企業・行政の極度の秘密主義の中で行なわれ、プルトニウムの盗難、テロ、労働者のサボタージュ防止などの名目で、管理体制がますます強化され、ひいては警察国家、そしてファシズム・軍国主義への道を開くことが懸念されている。この事は私たちに、戦争責任告白の立場から、歴史の主に対する信仰的応答の立場から課題を提起している。
5. 今原発を全部止めても、水力・火力発電所の遊休施設で充分まかなえると言われているとはいえ、今のような使い捨ての生活、浪費文明を無制限に続ければ、いずれはエネルギー不足時代が来ることは避けられないであろう。「エネルギー中毒」の状態から解放されるために、生産・流通部門はもちろん、消費生活を営む私達もまた、生活の在り方、ライフ・スタイルを見直し、思い切って「プラグを抜く」生活を創(つく)っていくことが課題となるであろう。このことを私たちは認識する。
6. チェルノブイリ原発事故の後、原発の廃絶や見直しなどが世界的な流れになろうとしている。にもかかわらず、日本の原発推進側だけは、チェルノブイリ原発事故に学ぼうとせず、火力・水力発電所の遊休設備が豊富にあるのに、原発の新設・増設を認め、青森県六ヶ所村に核燃料サイクルの一環として、原発よりはるかに危険性が高い再処理工場を計画するなど、ますます原発依存の姿勢を強めようとしている。このことを、私たちは憂慮する。

以上の理由により、私たちは原発と核に基づく文明が、破壊と死に至る道であることを知り、日本の原発推進の現状に深く憂慮を表明し、警告すると共に、原発と核の無い社会、すなわち脱原子力を目指し、いまや生命と愛と平和、そして希望への道を求めることが、私たちのみならず、すべての人々の緊急で重大な課題である事を強く訴えるものである。

1988年8月26日

日本バプテスト連盟第42回年次総会